第三の戒め：神の名を呼ぶ

出エジプト記２０章７節
ローマの信徒への手紙８章１４節

森島　惠　牧師

十戒の第三の戒めは「あなたの神、主の名をみだりに唱えてはならない。」で、「みだりにその名を唱える者を主は罰せずにはおかれない。」（出エジプト２０：７）と続きます。自分の都合だけで、むやみやたらに神に呼びかけることを禁じた戒めですが、イスラエルの民はこれを、「絶対に神を呼んではならない」という戒めだと受け止めました。

旧約聖書はヘブライ語で書かれていますが、イスラエルの民が日常生活でヘブライ語を使うことはなく、長い間、聖書が読まれることもありませんでした。そのようなこともあり、イスラエルの民にとって神は厳しく恐ろしい裁きの神であり、自分たちとは遠く離れたところに存在しているものでした。出エジプト３：１４に「神はモーセに『わたしはある。わたしはあるという者だ。』と言われ・・・」とありますように、そもそも神には名前がありません。ヤハウェは後の時代の人が決めたものです。このように神との関係が希薄な中で、イスラエルの民は戦いの歳月を生き続けていたのでした。

戦いに次ぐ戦いという険しい歴史を歩んで来たこのイスラエルの民の上に２千年前突如、神の御子と言われるナザレ人が現れます。その人こそ救世主イエス・キリスト、その人でした。主イエスは人々に向かい、隔絶された関係にあった神に「お父さん」と呼び掛けるように、しかも神はそれを喜ばれると、説かれたのです。神を恐ろしい存在とし、遠く離れたものとして生きて来たイスラエルの民にとって、この主イエスの教えはどれほど衝撃的なものであったか、それは私たちの想像を遥かに超えるものであったに違いありません。

詩篇５０：７に「・・・わたしは神、わたしはお前の神。」という神の言葉が伝えられています。主イエスは、神が自分たちから遠くかけ離れたところにおられると考えていた人々に「わたしはお前の神」という御言葉と共に、人々のすぐ近くにおられることを教えたのでした。ロマ書８：１４－１５でパウロは「神の霊によって導かれる者は皆、神の子なのです。あなたがたは、人を奴隷として再び恐れに陥れる霊ではなく、神の子とする霊を受けたのです。この霊によってわたしたちは、『アッバ、父よ』と呼ぶのです。」と、ローマの信徒へ書き送っています。キリストを信ずることにより神の子として生きることとなった者は皆、神をお父さんと呼ぶことが出来ると教えています。主イエス・キリストは断絶状態にあった神と人間を、自らの十字架上の死によって和解に導かれたのでした。

今を生きる私たちも「わたしは神、わたしはお前の神」と言われる神を憶えて「父よ」と祈らなければなりません。人間の心は移ろいやすく、弱く脆いもので、神の霊を受けた後も罪を犯してしまいます。それでも、悔い改めて赦しを乞う時、今も生きて働いておられる父なる神はすぐ近くにおられて、私たちを赦し平安の中に置いてくださるのです。

教会へ来て礼拝を捧げる、その礼拝は感謝で始まり、感謝で送り出されるべきものです。神を父と呼ぶことの出来る祝された日々を深く憶えて感謝し、それを伝え、すべては神の御心のままにと祈る者でありたいと願います。